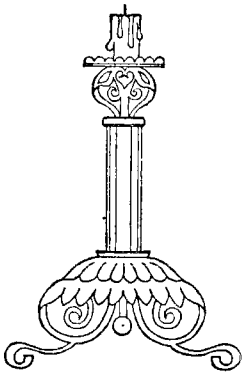
中原中也全集

3



評論・小説

中原中也全集　第3巻
評論・小説

1967年12月25日　初版發行
1979年6月10日　II版發行

著者　中原中也
編者　大岡昇平
　　中村稔
　　吉田凞生
發行者　角川春樹
印刷者　中内あき子

發行所　角川書店
東京都千代田區富士見
2の13 Tel (265)7111
振替東京3-195208
中光印刷・鈴木製本
0395-571703-0946(2)

目次

評　論

地上組織　七
夭折した富永　九
小詩論　一三
小林秀雄小論　一七
高橋新吉論　一九
Me Voilà　二三
生と歌　二四
詩　論　二二
河上に呈する詩論　二三
詩に關する話　二四
音樂と世態　二四
トリスタン・コルビエールを紹介す　二七
我邦感傷主義寸感　二五
アンドレ・ジイド管見　二五
詩と其の傳統　二七
（無　題）　二六

よもやまの話　二二
藝術論覺え書　二八
宮澤賢治の世界　二九
宮澤賢治全集　二九
宮澤賢治全集刊行に際して　一〇一
近時詩壇寸感　一〇二
近頃藝術の不振を論ず　一〇五
宮澤賢治の詩　一〇九
（「宮澤賢治全集」アンケート）　一一〇
（「日本歌人」アンケート）　一一〇
撫でられた象　一一一
菊岡久利著「貧時交」　一一八
作家と孤獨　一二〇
思ひ出す牧野信一　一二三
山羊の言　一二六
海の詩　一二八
我が詩觀　一三一
心理的と個性的　一三四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

草野心平詩集「母岩」 一五二
詩と現代 一五三
新短歌に就いて 一五五
詩壇への願ひ 一六二
詩壇への抱負 一六五
（無　題） 一六七
詩集　浚渫船 一七〇
デボルド・ヴルモオル 一七二
萩原朔太郎評論集 一七六
逝ける辻野君 一七七

小説・隨筆

分らないもの 一八一
その頃の生活 一九四
耕二のこと 二一七
夢 二三〇
蜻　蛉 二四一
鐵拳を喰つた少年 二四九
醫者と赤ン坊 二五六
校　長 二六二
（無　題） 二七二
＊
我が生活 二八一
我が生活 二八九
散歩生活 二九四
古本屋 三一〇
（無　題） 三一二
三等車の中 三二四
その一週間 三二七
亡　弟 三四一
私の事 三五六
引越し 三六〇
夏 三六九
一つの境涯 三七二
金澤の思ひ出 三七七
深夜の峠にて 三八一

西部通信　三八三
夜汽車の食堂　三九四
＊
童話その他
（断片）　三九六
山間秘話　三八九
（履歴書）　四〇二
家族　三九二
初冬の北庭　四〇三
解説　四〇四
編註　四三二

評

論

地上組織

私は全ての有機體の上に、無數に溢れる無機的現象を見る。それは私に、如何しても神を信ぜしめなくては置かない所以(ゆゑん)のものである。

人間にとつての偶然も神にとつては必然。運命は卽ち、その必然の中に握られてあり、吾等の意志の能力は卽ちその必然より人間にとつての偶然を取除いた餘の、所謂必然、その範圍に於て可能である。

私が今假りに神の全てを見知したとする。然し私はそれを表現することは出來ないのだ。何故と云つて神は絕對であり、私の表現は相對的に行はれるのみだからである。玆(ここ)に於て、人は神の全てを知るとも宿命の軌道を壞(こぼ)つことは不可能である。天才者常に空威張りし、豫言者嘆息するはまことに許容すべきのみ。然るに彼も亦神の手になれるもの、常に理想の方向へとのみ盲目なれど强き力もつ衝動と共に生く。

併し、辛じて詩人は神を感覺の範圍に於て歌ふ術を得るのだ。

最初に、神に腦裡に構へられしものは靜止せる理想鄕のサイ象。* それに制約の點ぜられたるより流

轉現象開始さる。然れば、神の御旨よりは罪惡もなし。されど、人の子の側より考へて、罪惡は犯すべからざるものなり。假りに神の御旨を人の子の側にも當嵌めんか、最初に神の腦裡に構へられし靜止せる理想鄕に逆源するのみ。そは神の御意に非ず。そこに於ては神も亦好奇心のみ。

然るに神人の子に未來を知るの力を與へ給はず。又、人の子の謂ふ奇蹟も容易きことなれど、人の子を遣りたる相對の世界には神自らも相對性以外を行ふとも見せられず。詩人は云ふ。神は絕對の沈默者なり、情なくまた非情なしと。然り然り。諺にあり「自然は旣定の法則を踏まずして一の塵、一の芥をも齎さず」と。

吾定義す。俗人とは、物象の有機的要素のみを見るものと。然るに俗人と雖も無機的要求をも眞に僅を見るなり。證據としては迷信の介在、恐怖あること等。而して無機的要求を見る心こそは魂を促し目覺ますものぞ。然り俗人もまた欲望あり、希望あり。

嚴密に云へば天才者とは、無機的要素を人間能力なるものゝあらん限りに於て見る者のことぞ。

無機的要求を見る程々に少き者は哲學者たり、それよりも尙程少き者は科學學者に適し、無機的要求最も多く見るものは詩人となるのみ。此の場合歷史詩人等の如きはやゝ例外とす。あゝ吾は歌はん。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

夭折した富永

ほつそりと、だが骨組はしつかりしてゐた、その軀幹の上に、小さな頭が載つかつてゐた。赤い鬱(もも)れた髪毛が額に迫り、その下で紅と栗との軟い顏がほつとり上氣してゐる。黑く澄んだ、黃楊(つげ)の葉の目が、やさしく、ただしシニカルでありたさうに折々見上げる。

彼は今日、重(ヘヤ)鬱なのだ。卓子(テーブル)に肘を突いたまま、ゆつくり煙を揚げてゐる。尤(もつと)も喫つてゐるものだけはうまさうだが。戸外は——地面は半ば乾いてあつたかい、空を風は、目標ありげにとぶ、梅雨期の或る一日だ。

そして今彼に對面する者は、彼をただ友人とのみ考へるなら、餘りに肉親的な彼の溫柔性に辟易(へきえき)しなければならない破目になるだらう。さしづめ、彼は教養ある「姉さん」なのだが、しかしそれにしては、ほんの少しながら物質觀味の混つた、自我がのぞくのが邪魔になる。

友人の目にも、俗人の目にも、ともに大人しい人といふ印象を與へて、富永は逝つた。そしてそれが、全てを語るやうだ。

人が、眞率にして齡を重ねる時、「習慣」の存在に對して次第に寬容になることは、自然なことであ

る。そしてそれは、それまではよろしい。けれどもやがて彼がその寛容を手段の如く把持するに至つて、彼は墮落である。だが、寛容であることは自說的であるよりも遙かに易しい、良心は遲かれ早かれ、磨滅する性質のものだ。それから、人々によつて眞面目な手記と見做されてゐるものはすべて、これら寛容な人達、殊には老人の手によつて遺された。

眞率にして富永は齡を重ねていつた。寛容を識つた。ところで代は甚だしいヂャナリズムでいつぱいだつた。彼は、自我崇拜主義者（となつた）であつた。智的享樂性に乏しくされた。ユーモアを虐待することと人格者であるといふことと、平和と苟安とは同義で通用する日本の、その帝都は彼の育つた雰圍氣であつた。かかる時自我崇拜主義者は微笑んだ——。

ボオドレエルは「自我崇拜閣下」と綽名された。けれども一方、會衆の前に飄然として出て來て、「君、赤ン坊の腦髓を食つたことがありますか」などといつてゐる。そしてかうした例は彼について多い。然らばボオドレエルは——ボオドレエルのは、彼が彼自身の部屋に於ける、天才的狂爛の、それが對他するに際して、卽ち狂爛が諦念の形式にまで置換されるに際して、その瞬間線上に於ける「自我崇拜閣下」*であつたのだと、君が若しボオドレエルを好きなら考へなければなるまい。さうしてサムボリスムなる名稱のきまるまで、その一派は「デカタン派」を以て自稱してゐることを思ひ合せて貰はう。

富永は、彼が希望したやうに、サムボリストとしての詩を書いて死んだ。

彼に就いて語りたい、實に澤山なことをさし措いて、私はもう筆を擱くのだが、大變贅澤をいつ

ても好いなら、富永にはもつと、想像を促す良心、實生活への愛があつてもよかつたと思ふ。だが、そんなことは餘計なことであらう。彼の詩が、智慧といふ倦鳥を慰めて呉れるにはあまりにいみじいものがある。

そしてこれが、夭折した富永である。誰の目にも大人しい人として映つた。富永がいまさらのやうに憶ひ出される。

小詩論

小林秀雄に

此處に家がある。人が若し此の家を見て何等かの驚きをなしたとして、そこで此の家の出來具合を描寫するとなら、その描寫が如何に微細洩さずに行はれてをれ、それは讀む人を退屈させるに違ひない。――人が驚けば、その驚きはひきつゞき何かを想はす筈だが、そして描寫の勞を採らせるに然るべき動機はそのひきつゞいた想ひであるべきなのだが。（斷るが、玆でいふ想ひとは思惟的なのでもイメッヂでのでも宜しい。）

生きることは老の皺を呼ぶことになると同一の理で想ふことは想ふことゝしての皺を作す。想ふことを想ふことは出來ないが想つたので出來た皺に就いては想ふことが出來る。

私は詩はこの皺に因るものと思つてゐる。

古來寫實的筆致を用ひた詩人の、その骨折に比して效果少なかつた理由は、想ふことを想はうとする風があつたからだと私は言ふ。或は、眞底想はなかつたから、判然皺が現れなかつたのだ。

然るに此の皺は決して意識的に招かるべきものではない。よりよく生きようといふ心懸けだけが我

等人間の願ひとして容れられる。

ラムボオは或一物に驚ろくとすると、彼は急ぎ過ぎたので、そして知能が十分だつたので、その驚きをソフィズム流*に片附けた。即ちラムボオの皺はソフィズム色を多いか少いかしてゐたのだ。けれども何れにしろ、皺の出來るより前に彼は筆を取つてはゐない。

實際、人は驚けばその驚きが何であるかと知りたいのは當然過ぎる程のことで、だからといつてその驚きはその時努力して何だと分る筈のものではない。けれども努力して凡そ何だとくらゐ分らないものでもない。それで大抵の人がその凡そ何かを探すのだ。そしてその凡そで以て何やかや書き出すやうになる。その凡そだ、詩を退屈にするのは。その凡そを持たないためには一心不亂に生きるばかりの人である必要がある。――ヴェルレエヌには自分のことは何にも分らなかつた。彼には生きることだけが、即ち見ることだけがあつた。それが皺となつたその皺は彼の詩の通りに無理のないものだつた。――人類が驚きにひきつづいた想ひを書かずに驚きの對象を記錄した方が手つとり早いと考へたことには微笑すべき道理がある。けれども詩人の仕事を困難にした一番主なものはこの道理だ。

ラムボオはこの道理の犧牲の最後の人として、金色の落日の光りを見せて死んで行つたのだ！

今言つた道理が、世界の中にどんな具合に駐屯してゐるかといふと、元來思想なるものは物を見て驚き、その驚きが自然に齎らした想ひの統整されたものである筈なのだが、さうして出來た思想は形

而上的な言葉にしかならないので、人間といふ社交動物はその形而上的な言葉の內容が、品性の上に現じた場合の言葉にまで置換へたので、そして社交動物らしいそのことが言葉を個人主義者であらしめなくしたので、世界はアナクロニズムに溢(みなぎ)つたのだ。それで例へば歐羅巴の如きレリジョンの確立してゐる所では、それに批評の發達した所では、批評家は個人的に言葉を使用しないで社交的圈を相手に話すので、言葉は專ら比較によつて成立つ品性についての言葉が人の頭に滲みきつて、そのため驚きはその滲みきつた言葉で片附られ勝になるといふことは想像出來るでせう。——ヴェルレエヌも隨分いまいふ言葉に禍(わざは)ひされてるといはれる所もあることを私は思ふ。

友よ、この一文を書きたくなつた今晩君が傍にゐて呉れたら僕は大變澤山なことが喋舌(しゃべ)れた。いろんな詩の方法が一度に三つも四つも私に見えて來て僕はもう此の一文を打切ります。けれどもこんな草稿でも君に見せれば大變好いと僕は思つてゐるのです。

つまり、この一文の結論は次のことなのです。

Ah! Que le temps vienne.
Où les coeurs s'éprennent!

そして僕の血脈を暗くしたものは、
「對人圈の言葉」なのです。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb